

能を切る



「四賢婦人・矢嶋桐子の生涯」

文 福永無想

第七回 「3人目の妻」

矢嶋家の者たちが益城に戻ってから3度目の秋が来た。庭の柿の木にはたわわに実がなっている。

「おばさま。勉強が終わったら、柿ちぎりばするて言うたとは、ほんと？」

源助の子どもらが、読み書きを教える勝子にせつづく。

勝子は書物から目を離し庭に目を向けながら、胸にのしかかっていることを思う。この時、隣の小谷村の武士・林七郎との縁談が持ち上がった。

林家は250石取りの武家で、城勤めの武士と違い、与えられた知行地を管轄して石高を得る在御家人の家柄である。有事の際は兵や労力を整えて軍務についていた。惣庄屋だったとはいえ、郷士の矢嶋家よりも家柄は格段上である。

主の七郎は林家の養子であつた。先代に妻子がなく、跡取りがなくては他家断絶になると、同じ小谷村の「寸志士分格」の富永家

次男・七郎を迎えた。寸志士分格とは、郷士が藩に納金(寸志)を献上し武士の身分を授かるもので、財政に苦しむ熊本藩が考え出した制度である。

七郎は横井小楠の門弟の一人で、家柄、学識ともにそろった人物であつた。裕福な家に生まれ、幼い頃から何不自由なく育てられた。最初の妻とは死別し、2番目の妻は娘を連れて家を出た。その後添えとして勝子が林家に入るとなれば、3人目となるわけである。しかしこの縁談もまた小楠に嫁いだつて七郎さんはいいお方だ。小楠先生も縁談を薦めておられるし、杉堂のこの家とは目と鼻の先じゃなかか」

源助は考えあぐねる勝子にそう言うて聞かせた。七郎のことは知っていた。勝子より7歳年上で、人間的に柔らかい兄の源助とは違い、無骨で昔気質の男という印象があつた。またこの頃、何人も後添えを迎えることなど珍しいことではなく、とうに婚期が遅れていた25歳の勝子にとって、この縁談を拒む理由など見つからなかった。

安政5(1858)年、勝子は木山川に掛かる、荒瀬橋のたもとにある林家に入った。

林家の屋敷は、風格あるたたずまいをにじませていた。まず式台を上がると玄関の間があり、正面に表の間が控えた。座敷には

回り縁がしつらえられ、手入れの行き届いた庭が一望に見渡せた。

源助に付き添われ、祝言の席が用意された座敷に向かう勝子だったが、この立派な玄関から家の中に入ったのは、この時のただ一度であつた。

「ふつつか者ですが、末長く、お頼みもうします」

祝言を挙げた夜、奥の間の寝所で勝子は七郎に三つ指をつけて挨拶をした。

「不自由があれば、言うてくれ」

ぶつきらばうな言い方ではあつたが、七郎の品のある顔立ちといい、その振る舞いには育ちの良さを感じさせた。翌朝、勝子は早くに起き出し台所に向かった。

「奥さま、朝の支度は私たちでしますけん」

トモという名のおなご衆と、乳母のアサが勝子の元に駆け寄り頭を下げる。そして、家族が食事を取る茶の間には、すでに3人分の膳が用意されていた。

林家には七郎の最初の妻との間に2男1女がいたが、長男は京都の熊本藩邸に詰めており長女は嫁ぎ、主の七郎と次男、それに乳母、男衆、おなご衆の3人が仕えていた。

板張りの茶の間の囲炉裏には炭火が起こされ、鉄瓶から湯気が上っている。勝子は膳に並べられた七郎の茶わんを手に取り、今日からこの人の人となりを受け入れ生きていくのだと、しみじみと感じ入るのだった。

※この物語は、矢嶋桐子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※()は30人以上の団体割引料金

